

生きる力

岡崎歯科医師会長
学校保健会副会長

天野 恵一 氏



教育随想



平成14年5月1日

5月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
岡崎歯科医師会長 学校保健会副会長 天野 恵一氏	
この人に聞く	2
車いすバスケットボール愛知県代表 洞田 博氏	
羅針盤	2
生活・総合指導員 金指由香里	
ふれあい	3
生平小 杉浦 史絵 岩津中 鈴木 里子	
特集	4
健やかな成長を願って -岡崎の鯉のぼり-	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
中国呼和张特市長来校 (昭和63年)	
この本を	8

人には転機があります。私にとっては小学五年生の時でした。それまでの私は病弱で学校へは欠席が多く、登校しても自分の場も友達も無く、教室は暗い空間と感じておりました。

五年生の春、担任が『怖い』と噂のA先生と聞いた時、小さな心は更に縮まった覚えがあります。一学期末の大掃除の時、先生は微笑みながら、成績はどうだったか尋ねられましたが、当時の私はただ俯くだけでした。終業式の日、今学期一番の成績の内容はと言って、先生が黒板に発表されたのが私のものだと知った時、暗く感じていた空間が、先生や同級生の顔が見える空間に変わって行ったことを覚えています。

この事は私と先生しか知りません

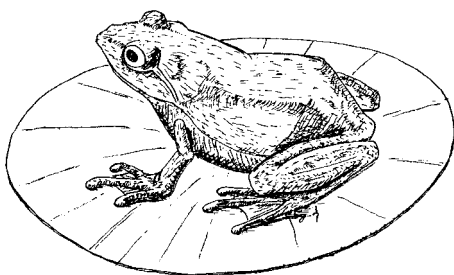
し、先生は一学期だけで他校へ赴任されましたが、一生忘れられない出来事になっております。

さて、私は今子供たちの心と体の健康に関わっております。健康の順位付けは、DNAの表彰の様だ等の考えにより、今年度から良い歯の児童、生徒の表彰も見直す方向になっておりますが、何でも一緒に、平等というのは如何でしょうか。

子供は常に自分を認めて貰いたい、自分の存在を自覚したいと考えています。目立たない子供ほどそんな気持ちの内にも強く働いていると思います。それを皆一緒にして扱えば、画一化した価値観の中で表現する能力のある人だけの社会となります。偶然に歯が良い、足が速い、絵が巧いと色々な選択肢を子供に与えて認

める。これが個性を伸ばす教育にも通じるし、そういった教育者側の『ゆとり』が子供たちに『生きる力』を与えることだと考えております。

(あまの けいいち)



ふるさとシリーズ
この人に聞く
球技系

夢あきらめないで

第一回全国障害者スポーツ大会
車いすバスケットボール愛知県代表

洞田 博 氏

昨春秋、第一回全国障害者スポーツ大会が仙台市で行われた。同大会の車いすバスケットボールで優勝された洞田博さんにお話を伺った。

十数年前、オートバイで事故に遭われ、十一か月もの入院生活を送られた。その入院中に誘われたのが、車いすバスケットの出会いである。

洞田さんにとって車いすバスケットはどんな存在なのかをお聞きした。

「一番は、人生に目標ができた



いうことです。けがをする前は、毎日がただ流れているだけでした。車いすバスケットを始めてからは、目標ができて、毎日が充実しています。けがをしなかったら、こういう感覚はずっとなかったと思います。」

もちろん、退院後すぐに気持ちを切り替えることができたわけではない。初めて練習に行くまでに半年。行ったり行かなかったりした時期がさらに半年あったそうである。

車いすバスケットに打ち込んでいこうと決心されたときのことを次のように話された。

「初めて出た試合で、たまたまシートが決まったんです。それを相手チームの選手が『今の、よかったですよ』とほめてくれたんです。それが、車いすバスケットを続けるきっかけになったんです。気持ちが切り替わると、練習にも身が入るから上達するんですね。」

学生時代は陸上の選手だった洞田さん。昨年の第一回全国障害者スポーツ大会優勝のときの喜びをこう表現された。

「選手やスタッフ、地元の人やサポーターなど総勢二十名ぐらいの人で喜びました。これは、個人競技では味わえない喜びでしたね。」

洞田さんには、小中学校からの講演の依頼も多い。

「子供たちに『夢あきらめないで』ということ伝えてたいです。選手になりたい、スタメンで出たい、試合で勝ちたい。そう夢を持ち続けてきたからこそ、自分の夢を実現できたと思うんです。」

今年の二月には、タイで行われた国際大会で準優勝。そして、今の目標は、四十五歳以上の選手が出られるシニアの全国大会で優勝することである。

「試合や練習をするたびに、次の目標が出てきます。もうこれでいいや、ということはないですね。」

洞田さんの夢は、これからもどんどん膨らんでいく。

氏名 ほらた ひろし
生年月日 昭和三十一年八月二十三日
住所 戸崎町才苗十五一三



総合的な学習の時間における学び

生活・総合指導員

金指 由香里

昨年度A小の三年生は総合的な学習の時間で「B川博士になろう」に取り組んだ。地域の川で遊んだり調べたりした活動をもとに、自分たちの川を大切にしようとすることをねらうものだった。授業では、「どんな排水が川を汚してしまうのか」を予想し、持ち寄った生活排水をCODパケットテストで調べる活動が展開された。「牛乳とかお茶とか飲めるものは大丈夫だと思ったけれど、川は汚れるんだ」と、子供たちは予想外の結果に驚き、困っていた。だが体験活動を通して追究することの確かさを全員が知ることができた。

それから一か月後、この学級の授業を再び参観する機会があった。「川の浄化にはEM菌が効果的」と調べたグループが「私たちだけの力では無理なので、みんな協力してく

一つになったとき

生平小 杉浦 史絵

「先生、あそび……。」

一年生のA男が指さしたのは、遠くの木々の間に見える小さな点。野鳥観察の時間での一コマである。この日は、学校近くの橋を目指し、あぜ道を歩いているところだった。A男の一言で全員が目指の先を見つめた。



確かにいる。遠くてとても小さく、見逃すところだった。しかし、名前こそわからないが、彼が指さしたところには、確かに野鳥がいる。周りの子供たちも目を凝らす。それぞれが持参した双眼鏡をのぞきこむ。

「あつ、いた。なんか、おながかオレンジ色だよね。」

「しっぽも長いよ。」

学級中の子供たちが、一丸となつ

て一羽の鳥に集中して、正体を明らかにしようとしている。B男が凶鑑を取り出し、調べ始めた。

「これじゃない。」

見つけた野鳥はモズだった。

私は思わず二人に声をかけた。

「A男君、よく見つけたね。」

A男の顔は一気に輝いた。

「B男君、よく調べてくれたね。」

B男は、周りの子供たちのまぶしい視線を浴びて、得意そうな表情を見せた。

学級全体の子供たちが一つになれた瞬間だった。



A男の質問

岩津中 鈴木 里子

授業中、計算練習を行っている。「先生、指を使わないで計算するってどうやるの」と、突然質問するA男に対して、大きな笑い声が教室中に上がった。私もびっくりして一瞬戸惑った。しかし、他の生徒に「では説明できる人、手を挙げて」と切り返すとあつという間に静かになった。当たり前のようにやっていることも、説明しようとするると難しく、

それまで笑っていた生徒もまじめな顔になった。簡単な例を挙げて説明すると、A男は「わかった」と言っていて、うれしそうに計算の続きに取りかかった。

ささいなことでも質問を続けるA男。そのたびに授業を中断して彼の質問に答える。時には的を射た質問で授業を盛り上げるのに大きく貢献した。思い切つて、質問する彼の姿勢を認め、ほめることに徹した。彼の姿勢が他の生徒へ影響を与え、クラス全体が自由に質問できる雰囲気が出てきたのである。

A男自身も「これからも数学がんばるよ」と言い、ますます張り切つて質問し続け、彼の成績は徐々に上がり始めた。

「先生わかった」そんな彼の声が、落ち込んでいるときの私への大きな励ましになっている。



「ださい」と呼びかけた。課題追究の方法を工夫し、自分の力で調べることで、子供たちは実に堂々と発言することができるよう成長していた。さらにその説明を聞いていたC君が「ぼくはどうしてEM菌を流すと川がきれいになるのかよく分かりません。本当なのか実際に試してみたらからやったらほうがいいと思いません」と発言した。担任のD先生は、この発言を見逃さなかった。EM菌を流そうという意見に決まりつつあった子供たちははっとした。「前にバックテストでも予想と結果が違っていたから、やってみないとだめ」というC君。このこだわり・立ち止まり・振り返りこそ総合的な学習の時間の重要な学びである。ここに到達した子供たちを支えていたのは、自分の学びの丁寧な積み重ねと的確な教師支援であった。

いよいよ総合的な学習の時間が本格的にスタートした。これまでの「とにかく実践してみよう」という移行期の段階を過ぎて、「何をどのように学ばせるか」「どんな力を身に付けるのか」という目的を明確にした教育活動が展開されなければならない。さらに発展段階を考慮し、系統性のある学習計画も必要であろう。

健やかな成長を願って

岡崎の鯉のぼり

◀中庭で子供たちが見上げる鯉のぼり（六ツ美南部小）



五月の澄んだ空を勇壮に泳ぐ鯉のぼり。端午の節句に子供の健康と成長を願うシンボルである。

愛知県は全国の鯉のぼりの三十分パーセントを生産し、県別生産高一位である。岡崎市は、その二十パーセントを占め、全国的にも指折りの生産高を誇っている。市内で鯉のぼり生産にかかわるメーカー・卸問屋は三社であり、すべて土呂西尾街道に集中していることは興味深い。歴史的背景としては、この街道には由緒ある寺社が多く、寺社に関する職人が多く集まったことが挙げられる。寺社の幕やのぼりを染めていた技術が、武者絵のぼり、鯉のぼりへと受け継がれていった。また、地理的な好条件として、材料の西尾木綿が手に入りやすく、近くには染色のりを洗い流すのに適した澄んだ水が流れる砂川があったことが挙げられる。

五月五日のこどもの日にちなみ、市内の学校でも鯉のぼり集会を行い、その中で、一年生を迎える会や音楽発表などの児童会活動をする工夫がされている。また、子供たちの手作りや地域の方々からの寄付による鯉のぼりを運動場に揚げる学校もある。五月の風を受けて泳ぐ鯉のぼりを歓声を響かせて見上げる子供たち、泳ぐ姿をじっと見つめる子供たち。どの子供も笑顔でいっぱいである。

町変わり人も変わりし鯉のぼり 百合山羽公ゆりやまうらこう

時代の変化に伴い、様々なものが変化していくが、子供たちの健やかな成長を願う気持ちは普遍である。



▲「筒引き」糠を練った糊で下絵を描く



▲土呂西尾街道



▲^{かぶと}手作りの兜と鯉のぼり (広幡小)▶



▲校庭にたなびく鯉のぼり (竜南中)



▲音楽集会で舞う鯉のぼり (三島小)



▲1年生を迎える鯉のぼり (愛宕小)



▲「乾燥」天日干して約半日行う



▲「色付け」染料を表と裏に塗る

お知らせ

● 教育最新情報

○ 連携教育

教育の原点は、家庭にある。家族の愛情に包まれて育つ子供は、言葉や行動様式など生活の基礎を習得していく。しかし、その子を取り巻く家庭環境や保護者の価値観の違いなどにより、子供が身につけている生活習慣や言語・行動能力は、様々である。

子供は、家庭という小集団社会から保育園や幼稚園という少し大きな集団の中で生活するようになる。その中で様々な体験をしたり葛藤したりして成長していく。六歳で小学校へ、十二歳で中学校へと進む。この九年間に将来を担う日本人としての資質の基礎（確かな学力・豊かな心）を身につけさせるところが義務教育である。この間の心身



の成長は、その後の人生に大きく影響するものである。ゆえに、発達段階に応じた適切な指導がとて重要となる。

一 連携の必要性

子供の発達段階に応じた適切な教育をするためには、保育園や幼稚園、小学校、中学校が、連携を図ることである。連携（相互交流）を通して、

双方が教育目標や内容、学校行事、子供の特性などを互いに理解し、教育活動や指導に役立てることができる。小学校における学びの実態から中学校における指導のあり方を考えることができる。中学生の姿から小学校における学習や生活の基礎・基本を明確にすることができる。

二 岡崎市の取組

岡崎市は、教育機関の連携に積極的に取り組んでいる。・教職員による授業公開や参

観、情報交換会
・子供を含めた行事交流や交流授業。

平成十三年度、六ツ美中部小学校と六ツ美中学校では、「異年齢交流ではぐくむ豊かな心」を研究テーマに、人とかかわる場面「夢中ふれあい・なかよしタイム」を設定した。教師の支援によって積極的に活動する小学生やリーダーシップを発揮する中学生など、心を成長させた子供の姿を見ることができた。

三 成果と課題

①教師にとって小中学校の教育活動のちがいや子供の成長を知るよい機会となった。
②様々な交流を通して子供たちに、他を思いやる心を育ませたり、自ら自立することの必要性を感じさせたりすることができた。
③小学校から中学校への入学が円滑に行われるようになった。

課題
①まだ試行的な取組であり、計画的な活動になっていない。
②連携の成果を道徳性の涵養や基礎学力の定着といった

観点で教育活動に反映できているか、検証することが必要である。

四 連携教育研究発表

・六月十九日 葵中・井田小・愛宕小
基礎学力の充実をめざして小中の連携を図る。

・十月一日 常磐中・常磐小
小中共同生活を活かして、共に高め合う常磐っ子の育成を図る。

・十月十一日 竜南中・緑丘小・上地小
心の教育の充実をめざして小中の連携を図る。

いずれも先進的・研究的な取組が紹介される。ぜひ、参考にしていきたい。

● 教育研究所だより

平成十三年度当初、若宮庁舎に教育研究所が移転して以来、その利用は大幅に拡大した。相談活動・諸会議・資料閲覧を含め、利用総合計は六八九四人であった。

完全学校週五日制に伴い、教育現場と今後も強く連携を図りながら進みたい。

教育研究所職員

所長 鈴木 由郎
副所長 栗田 錦治
就学相談担当 本多 末子
不登校担当 山本久美子
教育資料担当 岩月 健
福應 教恵

会議室利用

今日の課題に対処する会議や研修会での有効利用を望む。

相談活動

①就学相談 電話相談は随時、面談は予約制。
②不登校相談 三人の臨床心理士による面談は、電話予約。

教育資料閲覧

指導案・脚本・総合学習等の資料・その他教育情報が整っている。閲覧・貸出可。



▲六美中・六美小 長放課の遊び交流



◆平成十四年度校長会役員

〈小中学校長会〉

会長 澤 博史(葵 中)
副会長 鈴木敏雄(大樹寺小)

石川春次(城北中)
鶴田紀美子(六美中小)
顧問 青木宏氏(梅園小)
会計監査 杉浦正明(竜美丘小)

柴田隆夫(矢作北中)
庶務 杉浦博司(連尺小)
藤田吉信(六美中)

庶務補佐 名倉昭人(男川小)
会 計 石原博文(城南小)
平野有行(竜海中)
河合好文(南 中)
評議員 榊原正樹(三島小)
三津井秀夫(細川小)
篠田英昭(矢作北小)
丹沢英喜(常磐小)
本多有三(矢作東小)
上川清玄(矢作西小)
中根久治(六美南小)
富田勝男(北野小)
渡辺勝英(六美西小)

〈小学校長会〉

会長 鈴木敏雄(大樹寺小)
副会長 鶴田紀美子(六美中小)

会計監査 杉浦正明(竜美丘小)
庶務 名倉昭人(男川小)
会 計 石原博文(城南小)
会計補佐 本多有三(矢作東小)

〈中学校長会〉

会長 石川春次(城北中)
副会長 柴田隆夫(矢作北中)

会計監査 牧野好博(美川中)
庶務 中島 泰(六美北中)
会 計 平野有行(竜海中)
会計補佐 河合好文(南 中)

〈専門委員会委員長〉

法制 平野有行(竜海中)
理財 鈴木 忍(矢作中)
給与 金子一元(小豆坂小)
文教 杉浦博司(連尺小)
進路 河合好文(南 中)
研修 梶尾長夫(甲山中)
保体 浅井昭二(岩津中)

牧野好博(美川中)
中島 泰(六美北中)
梶尾長夫(甲山中)
菅沼 剛(東海中)
金澤 強(常磐中)
鈴木 忍(矢作中)

◆平成十四年度研究発表校

●六月七日 矢作南小

「子供の目が輝く授業の創造
—あたたかな学習集団を基
盤とする『かわり合い』
を通して—」

●六月十九日 葵中・井田
小・愛宕小
「小中連携による基礎学力
の充実をめざして」

●六月二十五日 矢作北中

「21世紀をたくましく生き
る生徒の育成を目指して
—生徒・地域・教師が輝
く学校づくり—」

●十月一日 常磐中・常磐小

「共に高め合う心豊かな常
盤っ子の育成
—小中共同生活の実践を通
して—」

●十月十一日 竜南中・緑丘
小・上地小

「豊かな人間性を育む教育
活動
—三つのネットワークを核
として—」

●十月十八日 大樹寺小

「自立心を育てる教育
—理科、社会科学、生活科、
大樹学習(総合)の実践を
通して—」

●十一月一日 矢作北小

「総合的な学びを育てる学
習指導
—自ら考え、発表できる子
どもをめざして—」

●十一月五日 男川小

「家庭や地域の人々とのか
かわりを通して自立を
めざす子の育成」

◆平成十四年度教育委員学校訪問

●五月九日 六ツ美中

●五月二十三日 矢作西小

●六月二十七日 本宿小

●九月十九日 福岡小

●十月三日 甲山中

●十月十七日 南 中

●十月三十一日 大門小

●十一月十四日 生平小

●十一月二十八日 梅園幼

●一月二十三日 秦梨小

●二月六日 連尺小

●二月二十日 根石小

※本年度も指導主事訪問の予定をします。

◆平成十四年度県教職員課学校訪問

●六月六日 常磐南小

藤川小

◆平成十四年度県義務教育課学校訪問

●十月二十一日 岩津中

◆平成十四年度特別委員会

●市民大学運営委員会

●月報「岡崎の教育」編集委
員会

●教員の研修に関する委員会

●教育課程研究委員会

●学校環境緑化推進委員会

●野外活動委員会

●情報教育推進委員会

●行事・部活動研究委員会

●完全学校週五日制研究委員会

●特色ある学校づくり委員会



▲現職教育委員会総会 矢作中 4月15日

・カ
ツ
ト



中国呼和浩特市長来校

(昭和63年)



写真提供 北中学校

昭和六十三年は北中が開校した年である。この年の七月、岡崎市の中学生在が初めて、前年に友好都市となった呼和浩特市を訪問した。その使節団長を北中の大山糺司教頭が務めた。以来、中学生がスポーツ交流やホームステイをするなど、友好の輪が広がっている。

写真は、昭和六十三年九月十二日に、呼和浩特市長の一行が北中を訪問したときの歓迎の様子である。この後、体育館での歓迎会、授業参観や揮毫を行った。さらに、その年の十月には呼和浩特市蒙古族学校少年少女歌舞団が北中を訪れ、生徒と交流した。

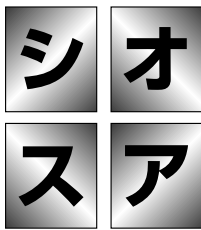
新香山中 宇野友啓



- * 果てしない宇宙のなかで思う未来のこと
毛利 衛 ￥1280
数研出版
- * 相田みつを私が「じぶん」に出逢うとき
編 中根 正義 北村 純義
毎日新聞社 ￥1429
- * 学校現場で生かすカウンセリング 上野 和久
朱鷺書房 ￥1600
- * 誰か僕を止めてください
産経新聞大阪社会部 ￥1400
角川書店

* 金ではなく鉄として 中坊 公平 ￥1400
岩波書店
少年時代、虚弱で運動神経も人並み以下、16歳まで寝小便の止まらなかったいわゆる劣等生の中坊少年。その彼が、どのようにして、弱きを助け、強きを挫く弁護士となり得たのか。
「人間、中坊の原型」が数々のエピソードとなって描き出されている自叙伝である。が、今日の教育の在り様や働くことの本質、個人と社会のかかわり方など読み手を引き込まずにはおかない。著者は語る「鉄は釜ではなく鉄の良さで生きる」と。

岡崎城など市公共施設五館で、子供たちの入場が無料化された。学校五日制下の休日を利用し、子供たちが積極的に文化財などに触れることが期待されている。この機会に、教師も、積極的に足を運んでみてはどうか。子供たちとの共通した話題を求めながら。



菖蒲の剣状の葉が、まっすぐに天を指す。泥の中に根を張りながら、緑の葉はつややかで美しい。
菖蒲は音が尚武に通ずるので、古来端午の節句になくはならないものとされてきた。そして、何よりもまっすぐに伸びていくことが、こどもの日にふさわしい。

朝顔の鉢の周りに集う子供たち。開いたばかりの双葉を慈しみ、汗まみれになって水をかける。
「何色の花が咲くのかな」「どこまで伸びるのかな」。
何気ない会話の中から好奇心が高まる。新緑のまぶしさに呼応するかのよう、子供たちの瞳も輝く。

水中にいるがごとく、甕の波に元氣よく泳ぐ鯉のぼり。原風景として郷愁を抱く。
住宅事情や保護者の考え方の変化で、この風景が少なくなってきた。子を思う親の気持ちは変わらないが、この子たちが大人になって、どの風景に親のありがたみを感じるのだろうか。